

令和元年11月30日

科研費・基盤研究A

「天文学との連携にもとづく考古学・考古史学研究法の構築」(19H00544)の
「日本固有の星名に関するフィールド調査」の研究報告書

報告者：宮地竹史

宮古島における調査研究成果報告

1. 8月19日(月)

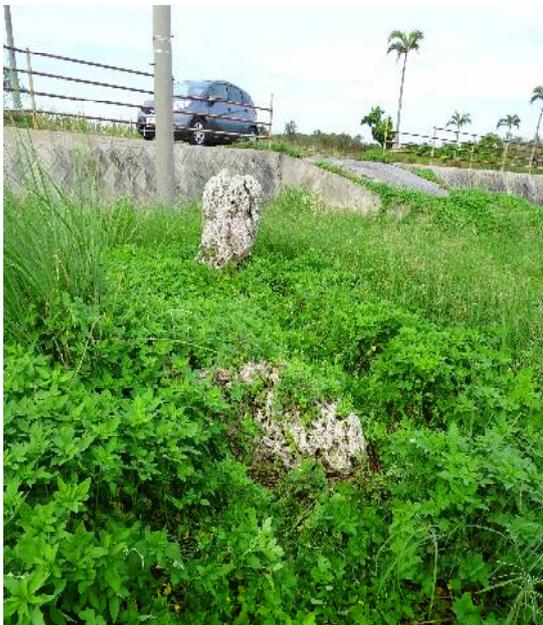
(1) 宮古島市教育委員会

星見石を疑う立石「神の杵、鬼の杵」調査にあたって、宮古島市教育委員会を訪問。存在場所などを地図で説明を受ける。史跡紹介のパンフレットも頂く。

教育委員会の担当(久貝弥嗣主任主事、新城奨春担当)からは、七又地区(道路側)の石については低い立石がないとの説明があった。

(2) 星見石を疑う立石の場所確認(七又)

現場を確認。道路から下に降りる畑の中で、大きい立石だけでなく、小さな石もあることを見つける。教育委員会の説明では、大きい立石だけと聞いていたが、大小の石の存在することを確認できた。



写真(左)は、七又地区の畑の立石と今回見つけた低い石(手前)



写真(上)は、「鬼の杵、神の杵」と北尾氏



写真(中央)は、史跡案内の碑

(3) さどやままさこ(佐渡山政子)氏(元地元新聞社の記者、民話研究家)と今回の調査協力と打ち合わせ。今回は忙しく、同行できないとのことだったが、民話の紹介、適任者(池間島の伊良波盛男さん、作家、郷土史家)の紹介をしていただく。

2. 8月20日（火）

(1) ぶばかり石（いす）、人頭税石（にんとうぜいせき）の確認

背丈が、この石の高さになったら税金（男は粟、女は布）を納めることになるという「賦計り石」が、平良荷川取地区に残されているが、これは八重山諸島にある「星見石」ではないかとも云われているが、宮古島には、石柱信仰もあり、否定的な意見もあることがわかった。

道路の拡張工事で、この場所に移されたということで、昔の位置にはなく、検証は難しいが、城辺と同様に大小二つの琉球石灰岩が並べられていた。周辺の方に、もとの砂浜の位置などについて、聞き取り調査。



写真：人頭税石とされる石（手前）。
大小の石の組み合わせになっている。



写真：奥の道路拡張でこの場所に移設された。元の場所に立つ北尾氏。

(2) 大神島

星名伝承の調査。詳しく伝承している話者を探そうとしたものの、星について語る話者に合えなかった。昭和6年生まれ、伊佐喜作氏より、昔の暮らしなど聞き取り。島で一番高い遠見台に出向くが、展望台になっていた。

時間的に池間島の調査が難しいため、次回以降に改めて実施することにする。



写真：帰路の船から見た大神島

(3) 池間島

さどやま氏から、紹介された伊良波盛男氏と連絡、水浜公民館の前にて夕方に古老の人たちが集まるとの情報を得て、出かける。戦後、遠洋にむかう鰹漁の船団に乗船していた方が多かった。数人の方から、聞き取り調査。池間島では、大きく明るい星を「ふつぶし（大星）」と呼ぶことなどがわかった。朝にも、夕方にも見られるという。

写真(左)：聞き取り調査する北尾氏。



伊良波氏の案内で、池間遠見台に上るが、方位石はなかった。

遠くに大神島がよく見え、遠見台の機能を果たしていたことがわかる。



写真：遠見台の案内板と遠見台からの景観。池間大橋の向こうに大神島がよく見え、かつてはここから狼煙や松明を使って通信をしていたことがうかがえる。



3. 8月21日（水）

（1）来間島

3名に聞き取り調査を実施した。来間島においては、多くの方が星を「ぷす」と呼んでいた。

特筆すべき点は、「んみぶし」という星名を記録したが、群れ星＝プレアデス星団だけでなく、一か所にかたまった星の集団はたくさんあり、それらは全て「んみぶし」と呼んでいたとのことである。

（2）伊良部島佐良浜

佐良浜で、昭和17年生まれの漁師から聞き取り調査。

（3）乗瀬御嶽

16世紀頃にできたと推測される乗瀬御嶽を訪問。航海の守護神。

（4）宮古島市上野庁舎

1980年代に実施したアンケート調査により、平良恵勇氏が星名伝承を詳しく伝えていた。当時の住所を元に場所を確認した。

（5）宮古島市宮國

平良恵勇氏（大正4年生まれ）が既に亡くなられていたことが判明。長男（昭和21年生まれ）に聞くために平良氏の畑を訪ね待つが、会うことができなかった。近所の約70歳の男性によると、平良恵勇氏はユタみたいな人であったとのこと。



写真：伊良部島佐良浜で漁師から聞き取りをする北尾氏

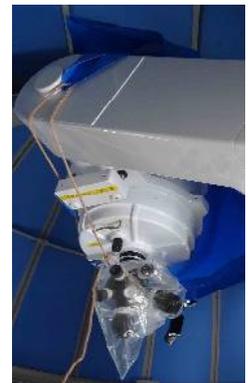
4. 8月22日（木）

（1）宮古島市宮國

再度、平良恵勇氏の畑を訪ね、長男の平良恵俊氏に聞き取り調査。「にのぱぷす（北極星）」のみ父親から伝え聞いていたとのこと。それ以外は、特になかった。

（2）宮古青少年の家

慶田昌宏所長（昭和14年生まれ）は、昔からの星名について、具体的ではないが聞いた記憶があった。特筆すべきことは、宮古島の調査の課題のひとつでもある南十字あるいは南十字付近の星列という「ウヤキプス」については、「聞いたことがある。富を与える星？のこと」と伝え聞いているとのこと。



屋上の天文施設（35cm シュミット望遠鏡など）を見学させて頂く。

(3) 宮古島市総合博物館

平良恵栄館長、平良研三補佐を訪問。来島目的などを話し、協力を依頼。資料などの提供を頂く（館長とは、後に荷川取漁港で偶然にも出会うことになる）。

平良研三補佐（下地在住）は、「ウヤキブス聞いたことがあるが、どの星かわからない」とのこと。「うやき」という星名の星があったことは確実のようだ。

(4) 高野漁港

5, 6人若い漁師がいたが、食事に行ってしまう、話が聞けなかった。

(5) 宮古島市久松漁港（松原）

漁師から話を聞くことはできなかった。久松五勇士の顕彰碑を尋ねたら、偶然にも「南十字、三ツ星」とある小さな拝所を発見。南向きの拝所で、まだ新しかった。南に降りる途中に、戦争中に使われたガマ（自然の壕）があった。通りがかりの方に聞くが、伝え聞いている人はいなかった。



写真：拝所の前に立つ北尾氏。右は碑文、白抜きで「三ツ星 ★ 南十字星」。

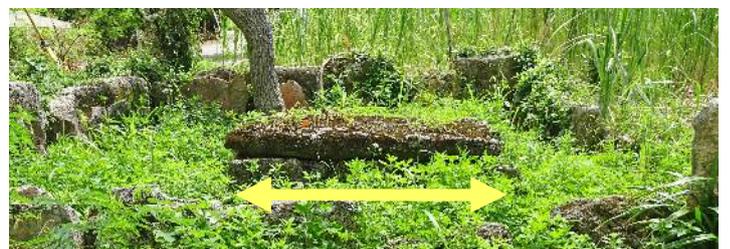
(6) 久松のみやーか（巨石墓群）

史跡案内に、久松漁港を上った場所に村落があり、その中に14-16世紀頃に建造されたという巨大な石でできた墓跡（石棺）が残っているとあったので訪問。

草むらや巨木のそばにいくつか見受けられた。据え付けられた方角が、冬至の太陽の方角と云われている。畳1枚ほどの石の蓋がされている。



写真：久松のみやーか（巨石墓群）
墓の周りは、大小の石で囲まれている。



(7) 久松漁港

漁師に聞き取り調査をするが、伝承者に出会うことはできなかった。



写真：久松漁港のようす

(8) 荷川取漁港

平良恵信氏（東仲間在住、昭和11年生まれ）より、父親が石炭を石垣から伊良部まで船で運んでいたこと、また、「北斗七星、昔のひとは、ニヌパプス目当てに航行しとったよ」と星を目標にしていたことを記録する。そこに平良博物館長が来られ、博物館長の父親であることが判明。

(9) 荷川取の人頭税石

人頭税石であることに疑義があり、星見石の可能性がないかの調査を実施するために、再度出かけて状況を確認。もとの砂浜の位置などについて、聞き取り調査をするが、星見石とする話はなかった。



荷川取の人頭税石と宮地

5. 8月23日（金）

(1) 保良漁港

砂川氏（約90歳の漁師）が不在。

(2) 城辺図書館

資料調査を実施した。

(3) 保良漁港

砂川氏を再度、訪問するが不在。

(4) 平良図書館

資料調査を実施した。

(5) 七又の星見石を疑う立石を再訪。

畑の所有者のお兄さん池間盛勝氏が通りかかり、話が聞ける。持ち主は、弟の盛幸氏。道路はもっと低かった。役場が石を持っていったところ、この石は動かしてはいけないということになり、戻した（そのとき、盛勝氏は島にはいなかったので詳細は知らない）。また、佐渡山安公氏が詳しいと言って紹介してくださったが、「宮古島には、巨石信仰があるので」ということだった。今回は、会う機会は作れなかった。

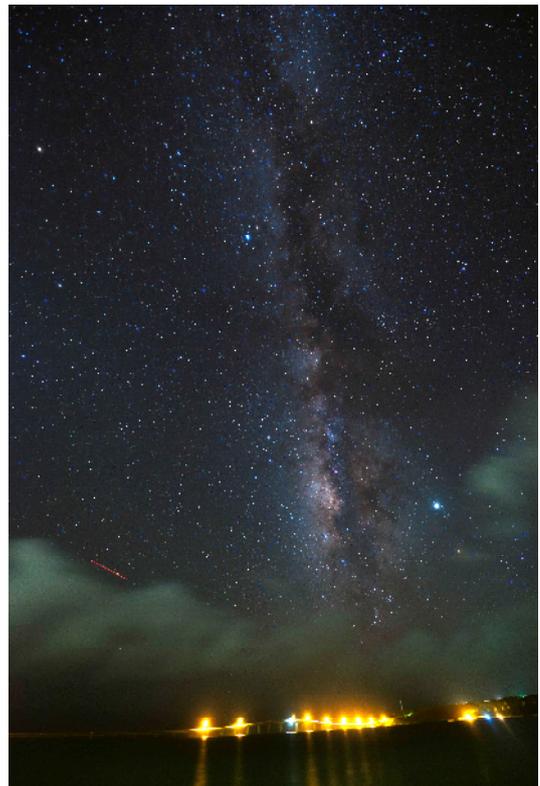
6. 8月24日（土）

第1回宮古島調査のまとめ、打ち合せを行なった。予想していた以上に調査研究の必要な事項が多いことが判明。台風接近で、宮地は便はやめて、石垣島に戻る。第一回宮古島調査を終える。

追記

今回は、リゾート開発が進む宮古島の星空環境も調べたが、市街地を離れると意外と星空が良く見えた。

写真は、来間大橋の上に見えた天の川
(8月22日)



第2回宮古島調査研究成果報告

1. 11月20日（水）

沖縄気象台の友利氏の紹介の宮古島市農林水産部長松原清光氏の父親の自宅を訪ねる。久松地区の調査に協力にも頂き、実施した。

(1) 長崎富夫さん（昭和25年生まれ、松原出身）

松原清光氏の父親、年上から聞いた星名は、ニノファブス、ユアキ（夜明け）ブス（星）、ムリブス（群れてるかたまり）（ひとつかいくつもあるのかはっきりとしない。特定の星とは認識していない）である。

(2) 下地金吉さん（昭和5年生まれ、松原出身）

「ニーヌハブス、北の方」「ウマノパプス、4つ小さな星かたまって。ウマノパプス4つあると思う」「大きな星ひかる。ウプラウサギ、あがず（東）に出る」と記録。ウマノパプスについては、南十字を意味した可能性がある。ウヤキブスは伝承していない。

(3) 松原信勝さん（昭和14年生まれ、父親は松原出身、父親の仕事の関係でポナペで生まれる）

「おやじがウヤキブスに夜明け手をあわしていた。ウヤキブスといって夜明けに手をあわして。あやじなんかやっていた。ウマノファブスとウヤキブスはいっしょ」と記録。朝早くひとつ光っている星がウヤキブスであり、ウヤキブスは南十字を意味しなかった。

(4) 洲鎌直子さん

南十字、三つ星と書かれた拝所について、昔は周辺が海だったが、港にするために埋め立てられてしまった。

星の神様の居場所だった」と聞く。「久松五勇士の顕彰碑を建造し、その後ろに階段を作ったために、神様の通る穴がふさがれてしまった。苦しい苦しいと神様が言っていたそうだ。神様を祀るために、神司の親子、信者などが1万円ずつ（2万だした人もいた）出し合って、8万円で祭事をして祀ったそうだ。

拝所は、拝所は神司の親子で、20万円ほど出して、石などを購入して建てたと聞いているとのことだった。



写真：西側から見た「星の神様の居場所」。今は、小高い丘のように見え、一番上に久松五勇士の顕彰碑が建てられていて、後ろに階段があった。拝所は、矢印の下にある。

(5) 平野さん（ユタ）85，6歳

松原のほうの人でなければ詳細わからない。南十字と三つ星（みつぼしと発音された。ミツブスでなく）を祀っている。北の階段が神様の通り道をふさがれている。南と西にも、神様の通り道の穴がある。

2. 11月21日（木）

(1) 池間島（前里）、伊良波盛男さんを自宅に訪ねる。

池間島のティンカイヌーインツについて確認をする。ティンカイは天界ではない。

「カイ」は、「に」「へ」という意味で、ティンカイは「天に」「天へ」となる。天の川は言わない。「ヌーイ」は「のぼる」。

「インツ」は「道」。天にのぼる道。西のほう（死者のいるところ）へのぼる。こどものころは、一周道路もなくて怖くて行けなかった。ティダガナス 太陽、ユイティダ 月であり、太陽は男神、月は女神。



写真：伊良波盛男さん（左）宅にて、右端が北尾氏、中央が宮地。

(2) 伊良部島佐良浜、伊良波淳世さん(昭和25年生まれ 池間前里出身)、伊良部漁協伊良波宏紀組合長(S49生まれ)の父親。

(松原清光さんから平良勝彦水産課長経由で依頼)

あまり記憶がなく、ニノファブシ(プスでなくブシ)という星名が出たのみで、具体的伝承は伝え聞いていなかった。

(3) 8月の訪問時に留守だった宮古島市保良、砂川清一さん(宮古島東原(あがはら)出身、大正15年生まれ、93歳)(おくさん昭和4年生まれも話に加わる)を再び訪問。在宅で話が聞けたが、多くは知らなかった。

①ウシウマサダチィ。いちばん上が牛、真ん中が人間、下が馬を連れて秋にのぼる三つの星、サダチィは連れていくという意味。(最初に三つ星が横に並んだ図を見せると、「ちがう」と砂川清一さん。縦にすると、そのとおりであると確認できた。明確に秋、オリオン三つ星が縦に三つ並んで昇ってくる様子を自ら見て覚えていたようだ。

②「太陽は休むけど保良川の水は休まない」という俚謡を記録。

星のことはよくわからないが、太陽の歌があると教えてくれた。歌詞は、「アカチタヤヤスムソガ(あがる太陽は休むが) 保良川(ボラガワ)のミズや やすむちの(やすむことないねー)」。

(4) 星見石を疑う立石

一度畑から移動したが、ユタの進言により、元に戻したという立石、即ち古来よりの位置を保っている立石について再測定をするために再訪する。畑の草が、刈り取られていて、大小二つの石が容易に確認でき、また畑に楽に入ることができた。



写真：七又地区の畑にある小さい石と大きい石の並びを記録する北尾氏

3. 11月22日（金）

- (1) 平井 諭さん（元、札幌青少年科学館プラネタリウム担当）の観測所を訪ね、知り合いの話者へのインタビューについて日程調整をお願いした。

写真：宮古島天体観測所にて、左が平井さん、右は北尾氏、中央が宮地



- (2) 佐渡山安公さんを訪ねるが、島外に出かけられていて不在。

- (3) 池間島前里、佐渡山利雄さん、前里出身、昭和11年生まれ

ヒュウイ・トゥイ・ウヤ（日取りを取る親、男性ムヌスー）の伊良波進さんから話を聞くことはできず、佐渡山利雄さん（さんぱつやさん）から聞く。

アカフナイ、アカフナイフス、あかく（あかるく）になっていく。魚釣っていても、この星が上がったら食わなくなる。（明けの明星のことをアカフナイフス）



写真：池間漁港

- (3) 宮古島市図書館

ネフスキーの方言ノート（大正から昭和にかけて宮古島を調査）等を文献調査。プスガマ、ウプラウサギ等が掲載されていることが判明。

4. 11月23日（土）

- (1) 池間島（前里）、伊良波盛男さんを再度訪問

調査を進めていくうちに不明な個所の確認事項が出てきた。また、伊良波さんから渡したいものがある）と連絡があり、再び訪問となった。

①「ガマ」は、沖縄本島では洞窟という意味。池間では洞窟を意味しない。池間では洞窟は「アグ」

- ②「ぐわー」が沖縄本島では、「小さいものを呼ぶときの愛称」
- ③ガマは池間では、「かわいい 小さい」 たとえば「恵子がま」は、「かわいい恵子ちゃん」という意味。
- ⑤プスガマタと言え、群れている星。小さな星たちの集まり。
- ⑥伊良波さんが後世に歌を伝えなければならないと、畑でおばあに歌を聞いても、歌ってくれないという話もあった。

(2) 浜川綾子さん（1961年生まれ、宮古島市久貝、池間島出身）を訪問
 浜川さんは、カンカカイ（かみがかり）のむぬすーである。

アグ（古謡の一種）にある「にぬふあんまちた にぬふあ 北の…」の歌詞は、「にぬふあぶし（北極星）ンマ（母）チタ（太陽）」という意味とのこと。（歌の録音はさせてもらえない）。

「んまちだ」は、お月。伝承としての星は伝え聞いておられなかった

5. 11月24日（日）

(1) 平井諭さんの紹介により、宮古島市下地（上地生まれ）、友利みつこさん（昭和4年生まれ）より聞く

寝る前に、必ず星を見た。
 星空がきれいで大好きだった。
 星のことをプス。テンヌプス
 ミヤギミニ（天の星を見上げて）
 いれば、人を憎まず、私の心もきれいになると思った
 そうだ。

西の空に星が輝いている
 と不幸があるといわれていた。

「ゆうべ、ぷすがながれた
 じゅー」と言ったが、流れ星
 のこと。



写真中央が、友利みつこさん

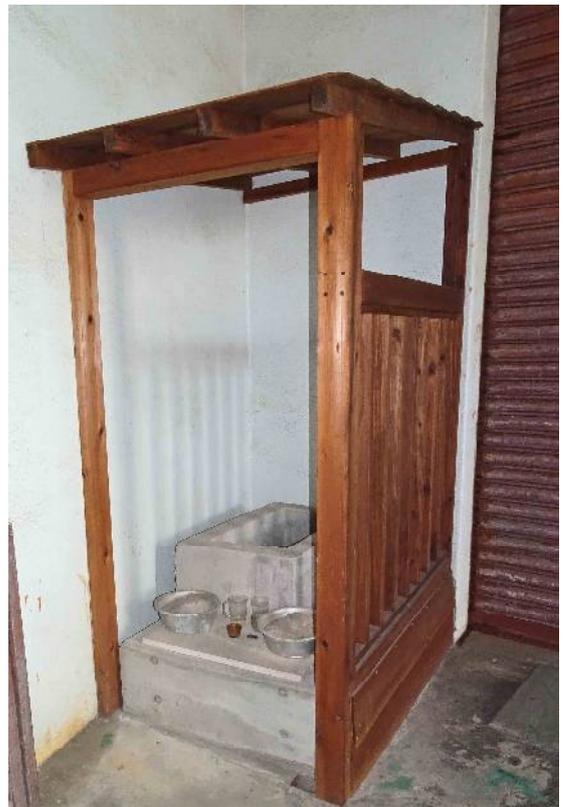
(2) 宮古島市久松、城辺出身の昭和13年生まれの話者（実家は農業で後に街中へ）
 宵の明星を「ユズフォプシ、ユズフォプス」。ゆず（夕飯）ふお（食べる）プス（星）。
 「シシヤクプスと呼んでいるのがあった。いまでも見えるかもしれんよ。ししゃく、
 ししゃく、みずをくむししゃくがあるでしょ。4つあって。ひとつすこしはなれてあ
 ったからそう呼んだのではないかな」と語る。

しかし、北尾氏は「宮古島で柄杓のことを本当にシシヤクというか調査の必要があ
 る」という。

6. 11月25日（月）

(1) ピヤミズカー

平良港近くに、天から七姉妹が降りてきて水浴びしていたという「天女伝説」が伝承されていて、ピヤミズカーという海に勢いよく流れる泉があったとされている。今は、埋め立てられてしまったが、その面影を残しているのが、みやこ商会敷地内の井戸として残されていた。



写真：みやこ商会（左）の一階奥に、拝所として保存されている泉のあと（井戸）。

(2) 宮古上布、上納の古謡とにぬふあぶし（北極星）

宮古上布は、宮古島から首里城への年貢（上納品）としては、最高の品であった。この織物は、1583（万暦11）年、宮古島の上地与人（ゆんちゅ）迎立氏の娘、稲石（いないし）刀自（とうじ）が、宮古上布のもととなる織物、綾錆布（あやさびふ）を織り、尚永王に献上したのが始まりとされている。

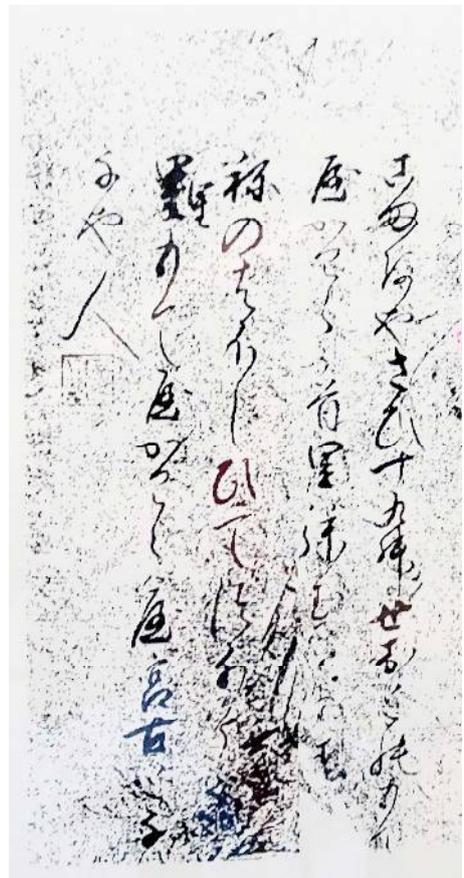
宮古島市伝統工芸品センターに、織機や上布が展示されているが、上納する船旅で北極星を目当てにして公開する古謡も紹介されている。「にぬふあ星」（北極星）を「あやぐ星」（輝く星）と謡っている。

「稲石が上布を創製せし時のアヤグ」（一部）

首里（王様）をおがむものとしよう

「にぬふあ星」（北極星）と共に

「あやぐ星」（輝く星）のごとく



7. 成果と課題

宮古島の現地での調査研究は、北尾氏と共に、8月20 - 24日、11月20 - 25日の2回にわたっておこなわれた。宮古島（伊良部島、池間島、来間島、大神島、多良間島を含む）は、他の地域に比べて、宮古島地区の先行研究は極めて少ない。

この2回の調査では、調べきれない。まだまだ未開の地域であり、引き続きの調査が必要である。

考古学グループの北條芳隆氏らも遠見台遺跡の方位石の調査を始めており、今後は連携して、新しい視点で調査ができればと思う。



写真：大神島の無人入島料入れ。
ワンコインでお願いします！

(1) 星名伝承の調査

2回の調査によって、ウシウマサダティ、ウプラウサギ等の新たな星名の記録した。また、ウヤキブスが南十字を意味するのではなく、明けの明星を意味した可能性を記録した。

しかし、太陽に関する歌の録音はできたものの、星については今後の課題となった。また、台風の影響により断念した多良間も、次回以降の課題となった。佐渡山安公さん、大神島の伝承者との都合についても都合があわず、次回以降の課題となった。

①大神島

- ・ムリプス、ニヌファプス、ナガリプス

②池間島

- ・アカフナイ、ニノハブシ
- ・ネノハブシ
- ・大星
- ・シャーカヌフツブシ（シャーカ＝明るい）
- ・ムヌファイフツブシ
- ・ユーファイフツブシ

③来間島

- ・プス、ピシ（星）
- ・ニヌファブシ
- ・ストウムティブシ（早朝の星）
- ・ンミブシ（群星、いっぱいある星）
- ・ティンパウ（竜巻）
- ・サウノパノプス（西の星？）

④荷川取

- ・ニヌパプス（北極星）

⑤その他

- ・ムリブス
- ・ティンヌプス
- ・トラノファ（星）

(2) 星見石を疑う立石

石垣島の郷土史研究家・黒島為一氏も、宮古島の人頭税石について「星見石」ではないかとの意見をもっている。実際調査もおこない、その主張を今なお強く持たれている。

われわれも現場を訪れたが、置かれている場所にも疑問をもった。納税の時期を決めるために設置するのであれば、役所内などにすべきであろう。

再測定を実施したが、結果は、むりぶし（むりかぶし、すばる）を見るためのものとは言い切れない。さらに調査考察をしたい。

また、今回の調査で七又の石も大小二つのペアであることがわかったので、早急に宮古島市教育委員会に保全のお願いをしたい。

教育委員会の久貝弥嗣主任主事、新城奨春担当）と連携しての測定、文化財としての表示についても、早々に提案したい。

七又の石についての今回の調査での位置情報は、以下の通りである。

東経：	125°	24′	37″
北緯：	24°	44′	10″
標高：	40m		
方角：	小さな石から大きな石への中心線は、真東より約5°北		

今後は、さらに文献調査、聞き取り調査を進めるとともに、現状の測定を実施したい。また、保存や文化財としての表示についても、必要に応じ教育委員会に協力を行なうこととしたい。

(3) 星名伝承の調査

時間的制約等により、話者に聞き取り調査ができていない個所がたくさんある。また、ウヤキブシ（プシ、プス）は、地域によって意味がことなるので、さらに範囲も広げ調査の必要がある。

宮古島では、首里城のある沖縄本島だけでなく、与那国島や八重山諸島などとも交流、交易があり、漁業だけでなく、遠くまでの航海をおこなってきた歴史があり、夜の航海で星を目当てにしてきたことは確実である。この点からも、星に関わる記録や伝承を探し出すことが必要と思われる。

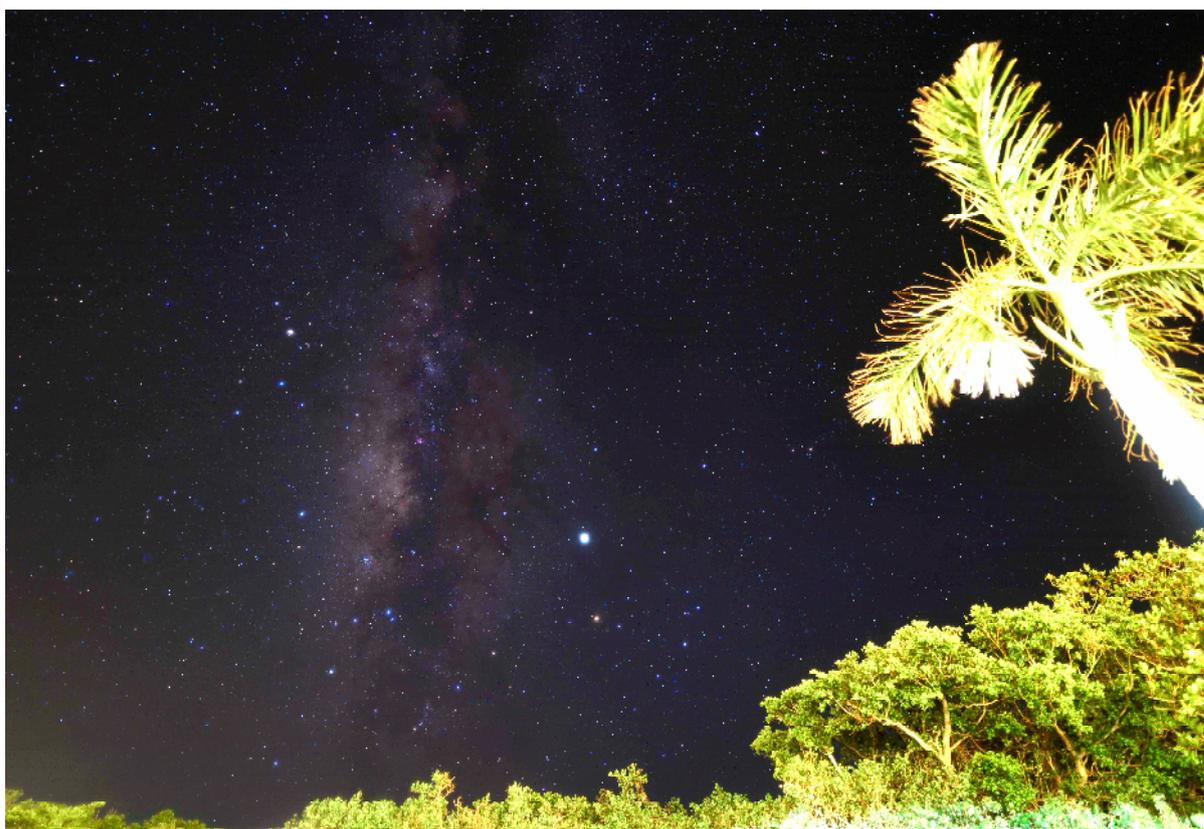
石垣島など、八重山諸島でも民話、古謡、伝承話についての文献調査、聞き取り調査から、多くの星名などが発掘できた。宮古島においても、市立図書館が整備、新築されて収蔵量も増えているので、文献調査も今後の課題としたい。

また、各地域や小さな島々の公民館に残る資料なども、調べてゆきたい。

(4) 地元の郷土史家など研究者との連携

聞き取り調査では、話者の年齢や、これまで受けた教育などの影響が大きく、実際の時代から伝えられてきたことかという検証が難しい。

今後は、今回知り合えた佐渡山政子氏、伊良波盛男氏、佐渡山安公氏など、長年にわたって宮古島の歴史、文化を研究されてきている方々の協力を得て、調査研究を実施することとしたい。



写真：宮古島で見える天の川